りと猫族出てくる　**六月号・佐佐木定綱**

オクターヴをいづれ越えむと少年のかぼそき指は鍵を叩けり　**峰　朝子**

春の夜の星としてあり志村けんに食われていったスイカの種が　**七月号・屋良健一郎**

花門をゆっくりくぐり新天地ろう学校に捧ぐ両の手　**山本　絲人**

子の眠気かすかな光とつながつて匙にて啜るコーンフレーク　**八月号・佐佐木頼綱**

芹ナズナ御形ハコベラ仏の座湖北の観音に巡礼は来ず　**植山　俊宏**

ゲーム内世界に菌はおらねどもマスクをつけるアバターたちに　**松本きさら**

作品評を担当させていただいたこの一年の約半分がコロナ禍という異常事態の中でした。コロナの歌が登場し始めた五月号ではウイルスやコロナは情報として、マスクは嘱目の一部として詠まれていましたが、六月号からは一気にそれぞれの生活と密接に係わるようになり、七月号あたりからは直接コロナに関する言葉はなくても背後に自粛の生活のあることが前提の作品が多くなりました。コロナ禍という共通の条件のもとで歌を詠むことは極めて特殊なことであったと思います。

作品評を書かせていただく為には一人一人の一首一首をおろそかにせず読むことが第一なのですが、作品を何度も読み返すうちに作者と一体化していくような自分に気付き、歌の持つ不思議な親和力に驚かされました。故に作品の選出は悩ましいことでしたが、一年間選ばせていただいた作品に絞ってその理由を大雑把に考えてみますと、各々が多様な表現と主題を持ちつつも歌の根拠に何を置くか、が明確な作品であったように思います。中村佳文氏、森屋めぐみ氏の、非日常と現実の結びつき。原ナオ氏、青木信氏、峰尾碧氏、佐佐木定綱氏、屋良健一郎氏、佐佐木頼綱氏、の感性の表出の独自性。永田千奈氏、細溝洋子氏、鈴木陽美氏の、気付きと着眼の面白さ。和田敏典氏、高山邦男氏、佐佐木朋子氏、井関輝美氏、峰朝子氏の、平凡あるいは些細と思える日常の中の大切な事や美しいものの発見認識。晋樹隆彦氏、大口玲子氏の、現実の鋭い提示。菅野彰一氏、植山俊宏氏の活きた地域性。本田一弘氏、田中和美氏、塩川郁子氏の、日常に魅力を持たせる掬い方。十亀弘史氏の、焦点とする自己の環境。田中拓也氏、山本絲人氏の教師という職業を主軸にした心。野原亜莉子氏、松本きさら氏の、命のないものに命を持たせた手腕。改めて学ぶことの多さを実感しました。

九月号の作品より二首

・親鳥に深く抱かれる卵（らん）のごとマスクのなかに蒸れている顎　藤島　秀憲

・変化する時は動かぬものと知る背（せな）が赤みを帯びて歩めり　鷺沼あかね

作者の思いから遠い鑑賞もあったと思う中で頂きましたお便りは、大変励みになりました。一年間ありがとうございました。